

第54回造本装幀コンクール 受賞者インタビュー

日本印刷産業連合会会長賞：『隙ある風景』

出版社

日下慶太氏

印刷会社

藤原印刷 平澤和紀氏

型抜

山岸紙器製作所 山岸博行氏

加工

協栄製本工業 清水賢一氏

製本

ダンクセキ 滝澤秀憲氏



©佐藤祐介

●御社の活動について教えてください。

日下：コピーライターとして会社勤めをしながら個人の写真家として活動しています。

●今回の作品のような造本にされたのは、どのような経緯があったのでしょうか。

日下：十年ほど前から写真集をずっと作りたいと思っていました。とはいえ、それはどこか遠い国の話のような現実味のない話でした。とりあえず一度ZINE※を作ってみました。それを会社の先輩であったアートディレクターの正親さん（本作品の装幀家）に見せると、「日下の写真を成仏させたらなあかな」と正親さんが写真集を作ってくることになりました。正親さんは「日下は誰もが顧みないようなものを撮っていて、それはダンボールみたいなもんやから装丁もダンボールにしようか」と言われまして、最初何を言っているかさっぱりわからなかったのですが、正親さんの頭の中のイメージが徐々にわかってくるにつれて「これはおもしろい！ぜひやらなきゃ」と思いました。

※好きなものを自由な手法で一つの冊子にまとめること

●応募したきっかけや、受賞の知らせの感想、周囲の反応など、いかがでしたでしょうか。

日下：とてもおもしろい本ができたので、ぜひとも賞に応募したいと思っています。いろいろと探していると、この賞があることを知りました。本がユニークだからきっと評価してもらえんと思いつつも、個人の自費出版だから賞はもらえないかもなと思ってました。でも、受賞することができてとてもうれしかった。神様はいますね。個人の本でもきちんと見てくれているんだと思いました。そして、賞はぼくだけではなく、大変な造本装幀に取り組んでくださった方々の協力もあってのことだったので、みなさんに共有するととても喜んでくれました。

滝澤：納品を終えてから、時期が経過していたので、受賞したと聞き驚きました。会社で社員に共有したところ、感激しておりました。普段装幀や造本について、評価されることが無いので、良い機会となりました。

山岸：地味な業界ではあるが、本という形に残るもの、受賞作品に携われてやりがいを感じました。

清水：今まで考えたこともなかったことが現実のこととして現れ、作品の一部分ですが関わったことを非常に嬉しく思いました。周囲からもこのような賞を頂いたことに驚きと喜びの声が上がりました。

平澤：数多くの素晴らしい装幀に携わらせていただきましたが、中でも際立って熱意がこもったこちらの作品が評価され、とても嬉しく感じました。

●作品制作において、こだわった点、苦勞した点、そのほか制作についてのエピソードがあれば教えてください。

日下：まずダンボール集めが大変でした。ダンボールだったらすべていいというわけではありません。いい絵柄のダンボールを選び、トリミング位置を指定し、大量のダンボールを送る。そして出来上がった本が自宅に送られ、ぼくがシールを貼り、タイトルを手書きする。家はダンボールと写真集まみれです。

滝澤：最初の装幀仕上がりを聞いた時はビックリしました。表紙はダンボール、背中は布のガムテープ。どんな仕上がりになるのだろう？と思いつつながら制作しました。表紙も著者の方がダンボールを集め、選んだ箇所を抜き、最後は著者自らタイトルを書き込み、シールを貼る。1冊1冊想いのこもった本だと思いました。

山岸：1つの作品の中に色々な加工方法や造本アイデアが詰まっており、仕上がった本を見るとより

実感します。

清水：初めて行う加工内容でしたので、「作業方法」「作業道具」「段取り」等を頭の中で色々とシミュレーションしながら進めました。各工程の皆さまのアイデアで当初のイメージより、実現可能かつ作業し易い加工手法にもなり、皆さまの本づくりに対する熱意を感じました。

平澤：作品の世界観を損なわない補正と印刷仕上りを意識しました。また、複数にまたがる製本加工の間に入り、リスク回避と品質向上を協力会社の方々と相談しながら進めました。

●一般の方は「造本」という言葉になじみがないかもしれませんが、「“造本”の観点から、本を視る」ポイントがあったら教えてください。

日下：この本はこだわった分、値段もそこそこするんです。でも結構売れてるんです。海外でも。みなさん、本としてというより、モノとして買ってきてくださっている人が多い。誕生日プレゼントとか、自分へのご褒美とか。造本がある一線を超えると、本を超えて「大切なモノ」になるのだなあと思いました。

滝澤：コスト面から同じ仕様の物が多く本屋でもなかなか変わった本を探すのが難しい時代になってきました。情報内容を見捨て、変わった装丁の本を探してみるのも面白いかもしれません。

山岸：10年、20年…月日が経ち、久しぶりに本（写真集・アルバム・昔よく読んだ本）を開くとき、電子では感じられない、当時の懐かしさを味わえます！

清水：本はインテリアです。読み終えた順に並べるのも良いですが、気に入った本を色々と並び変えて背表紙による絵画を作ることもできます。和風にしたり、洋風にしたり。また、その中に手に取って読み始めてしまう本が有ることは楽しいです。

平澤：見た目の印象の強さはデザインの力の影響が大きいです。見えづらい製造過程における手間や労力が最終的に作品の真の力になると思っています。興味のある作品を見かけた時には、製造サイドがどんな発信をしているかにも着目してもらえると嬉しいです。（了）